1969年と1970年に撮影された沖縄本島各地のグスク
―鳥羽正雄撮影の兵庫県立歴史博物館所蔵写真資料より―

山本 正昭

Photographs of Gusuku castles across Okinawa Island taken in the 1969 - 1970
－Citing photographs by Toba Masao and kept in the Hyogo Prefectural Museum of History－

Masaaki YAMAMOTO

沖縄県立博物館・美術館，博物館紀要　第18号別刷
2025年３月14日

Reprinted from the
Bulletin of the Museum, Okinawa Prefectural Museum and Art Museum, No.18
March, 2025

沖縄県立博物館・美術館，博物館紀要（Bull. Mus., Okinawa Pref. Mus. Art Mus.），№18, pp. 37-46. 2025

1969年と1970年に撮影された沖縄本島各地のグスク
―鳥羽正雄撮影の兵庫県立歴史博物館所蔵写真資料より―

山本 正昭 [1)]

Photographs of Gusuku castles across Okinawa Island taken in the 1969 - 1970
－Citing photographs by Toba Masao and kept in the Hyogo Prefectural Museum of History－

Masaaki YAMAMOTO [1)]

はじめに

沖縄県内に所在するグスクについてはその解釈をめぐって1960年代から論争が展開されてきたが、そのグスクの中でも城郭としての性格を有することは戦前から指摘がなされていた（註１）。

グスクには城郭としてのどのような特徴を有していたのか。実地に則して確認しその詳細について初めて触れたのは鳥羽正雄である。鳥羽はその著書である『城郭と文化』の中で「沖縄の城」の項目を掲げて、105ページにわたって触れている。その内容については日本本土の城郭との比較をしつつ、沖縄の城郭の特徴を端的に紹介している（鳥羽1942）。

鳥羽の略歴については1899（明治32）年に東京都市ヶ谷で生まれ、1924（大正13）年に東京帝国大学文学部国史学科卒業後、農林省、静嘉堂文庫の嘱託員、大正大学講師を経て1932年に神宮皇學館教授に着任している。1933年には陸軍省より本邦築城史の編纂事務を嘱託されている。1956年には東洋大学教授に着任し、1958年に同大学より文学博士号を授与されている。1975年に中京大学教授に着任し、1975年に退官、1979年に逝去、享年79歳であった（中京大学学術研究会1974）。鳥羽の著作は1933年の岩波書店刊『城郭の変遷』から1930年の創元社刊『日本の城』、1971年の東京堂刊『日本城郭辞典』など多数に及ぶ。また、1966年に日本城郭協会の設立に参画すると共に理事として携わった。

このように鳥羽の研究足跡を辿ってみれば戦後の日本城郭研究史において大きな功績を残しているというのは異論の余地は無い。そしてそれは沖縄の城郭についても戦前から目が向けられていたことは冒頭に触れたとおりである。一方で戦後、復帰前に沖縄本島の城郭を訪問していたことについては触れられていない。それを断片的に知ることができるのが兵庫県立歴史博物館の所蔵されている鳥羽が撮影した計567葉にも及ぶ写真資料である。その中に1969年と1970年に撮影されたと思われる沖縄県内各地を撮影した写真資料を見ることができる。

本稿ではそれらの写真資料を紹介していくと共に、撮影された場所の特定を行っていくものである。

１．鳥羽正雄撮影の兵庫県立歴史博物館所蔵写真資料概要

鳥羽正雄の旧蔵資料は『鳥羽正雄コレクション』として兵庫県立歴史博物館に所蔵されている。その内容は今回紹介する写真資料のほかに近世の軍学書から絵図類、近代の城郭調査資料など多岐に及ぶことが同館のHPにて紹介されている。これらの史料は2003年には同館にて特別展『城郭研究の開拓者―鳥羽正雄とそのコレクション―』として一堂に公開されたほか、近年では2024年に同館令和６年度特別展『琉球王国と首里城』にてその一部が展示公開されている（堀田2004、兵庫県立歴史博物館2024）

鳥羽正雄コレクションの中でも写真資料は全国各地の城郭写真が撮影されているが、その中に1969

[3)] 沖縄県立博物館・美術館　〒900-0006　沖縄県那覇市おもろまち３－１－１
Okinawa Prefectural Museum ＆ Art Museum, 3-1-1, Omoromachi, Naha, Okinawa 900-0006, Japan

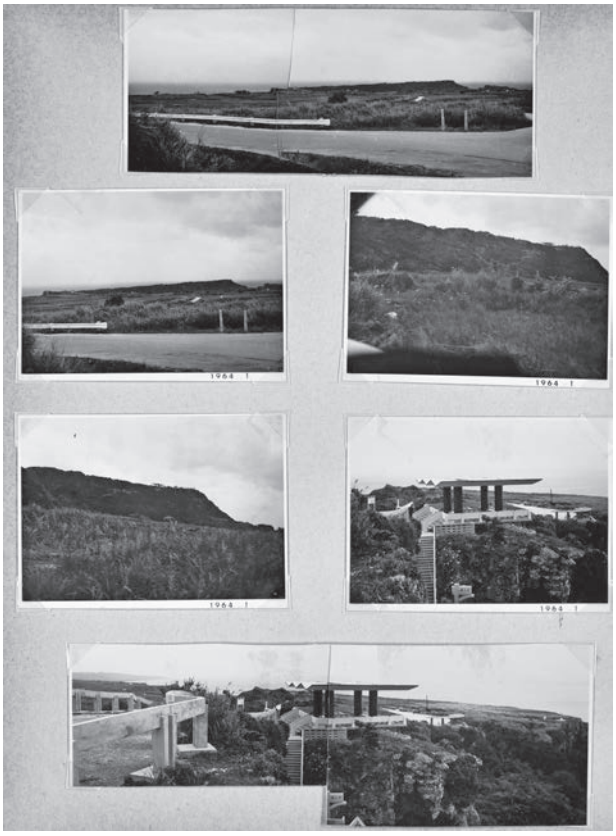

写真１　アルバムシート収納状況
（兵庫県立歴史博物館蔵）

年と1970年に来沖した際に沖縄本島各地で撮影された写真資料も多数見られることが令和５年度に筆者は確認した。写真資料はモノクロプリントでかつアルバム形式で、１シートにつき３葉から７葉が収められている（写真１）。写真枚数は166葉に及ぶ。その大半が沖縄本島に所在する城郭であるが、中には場所が特定できないものも多く含まれている。また、写真を裁断してパノラマ様に横つなぎに合わせてアルバムに収められている写真資料が９葉含まれている。このような形で加工されている写真には城壁や遺跡遠景、更には城郭内の最高所から遠望できる風景が映っている。

このアルバムは鳥羽正雄の関係者から兵庫県立歴史博物館へ寄贈され、平成11年度に寄贈手続きが完了している。

更にモノクロネガフィルムも残されており、こちらは401カット見ることができる。このフィルムには沖縄本島に所在する城郭以外に拝所や井戸、集落の風景写真のほか琉球舞踊や集落祭祀の様子等が撮影されている。これらのモノクロネガフィルム平成17年度に鳥羽正雄の関係者から兵庫県立歴史博物館への寄贈の手続きが完了している（註２）。それぞれに「昭和40　沖縄　今帰仁・普天間」「昭和40　今帰仁・首里」「浮島祭、」「昭和40　沖縄　玉城」「昭和40沖縄（松の下）」「昭和39　糸満・那覇・左馬」「昭和39　中城城跡・浦添」「昭和39　首里・松の下」「昭和39　沖縄・長篠・吉田・名古屋」といったメモが附されている。

このようなメモから鳥羽は、1969年から1970年にかけて北は今帰仁村から南は糸満市あたりまでを訪問していることが窺われる。また、これらのモノクロネガフィルムの中から鳥羽にとって特に重要な画像をモノクロプリントし、写真アルバムに収めたものと想像される。但し、これらの写真資料については中城グスク以外、具体的な遺跡名並びに場所、撮影月日等の記載が見られないため、現状において沖縄本島の大まかな地域と撮影年しか判明していない。

本稿では、モノクロネガフィルムは相当数に及ぶことから紙数の都合により、本章にてその概要を触れるに止め、以下に写真アルバムに収められているモノクロプリントされた写真資料についてその詳細を触れていきたい。

２．場所が特定できる写真資料

モノクロプリントに見る城郭の中で特定が可能であったのは今帰仁グスク、中城グスク、首里城跡、浦添グスク、三重グスク、玉城グスク、高摩文仁グスクの７カ所のグスクであった。

これらのうち首里城跡は園比屋武御嶽石門（写真２）、守礼門（写真３）、龍潭（写真４）、首里当蔵の街並み（写真５）といった当該グスク周辺にまで足を広げて撮影している。また、撮影当時において首里城跡は1950年から1983年にかけて琉球大学のキャンパスであったことから（註３）、地上に首里城跡の遺構はほとんど見られない状況であった。しかし、詳細な位置は不明であるが当時の石積みと思われる遺構が写るものや（写真６、７）、首里城跡の西のアザナ附近から那覇の市街地の眺望を写したものも見られる（写真８）。

浦添グスクにおいても当時の遺構は沖縄戦により

写真２　園比屋武御嶽石門

写真３　守礼門と琉球大学校舎

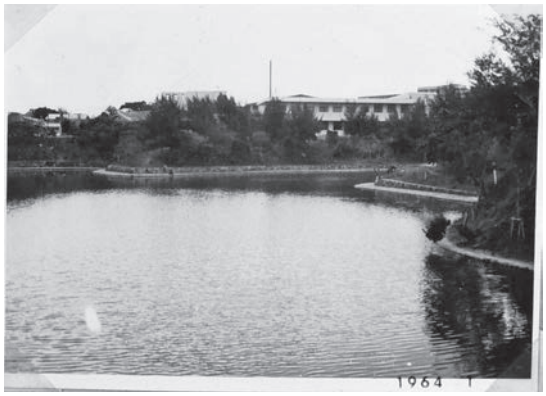

写真４　龍潭

写真５　首里当蔵の街並み

写真６　首里城跡に残る石積み①

写真７　首里城跡に残る石積み②

写真８　首里城跡から望む那覇市街地

写真９　浦添グスク内

（本ページの画像は全て兵庫県立歴史博物館所蔵）

写真10　浦添グスク近くの採石場①

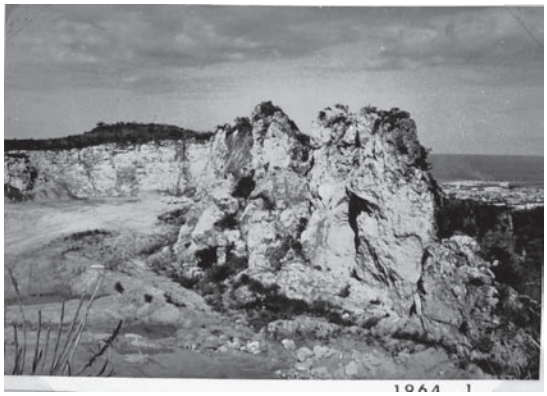

写真11　浦添グスク近くの採石場②

写真13　三重グスク内の拝所とその周辺

写真14　玉城グスク全景

写真15　玉城グスク内の御嶽石畳

写真16　玉城グスクから北東側の遠望

写真12　三重グスク全景

（本ページの画像は全て兵庫県立歴史博物館所蔵）

大きく破壊を受けていたことから、石積み等の遺構を見ることができないものの、大半が荒蕪地となっていた当時のグスク内部の様子が写されている（写真９）。また、隣接する浦添ようどれや伊波普猷の墓、当該グスクの北西側にかつて存在していた採石場なども写されている（写真10、11）。

三重グスクは崖上に残る北側から東側にかけて残る石積み遺構の遠景を捉えた姿が写されている（写真12）。現在は建物が密集していることから、このような姿を見ることはできない。当該グスクの周辺は戦後に開発が著しく進行していくが、撮影時期はその直前に当たることが分かる。かつて石灰岩崖上縁辺部を囲繞していた石積みも根石付近が残る程度しか現在、確認することができないが、これらの写真資料から高さ１～２ｍほど残存している状況が窺われる。かつて那覇の湊口を防備する砲台場として機能していた三重グスクの旧状が把握できる。他に当該グスク内部にある拝所周辺の様子が写されている写真資料が３葉見られる（写真13）。

玉城グスクは北東方向から全景を捉えた姿が写されている（写真14）他、主郭にある拝所と岩盤を刳り抜いたアーチ門やその内部にある天つぎあまつぎの御嶽へ至る石畳道（写真15）、その周辺の石積み上からグスクの北東側を眺望した風景が写されている（写真16）。

高摩文仁グスクは頂上に戦後設置された展望台（写真17）や北東方向から全景を捉えた姿（写真18）や北側から当該グスクが立地する丘陵一帯が写されている（写真19）。また展望台付近から周辺を眺望した風景も見られ、当時の摩文仁集落が俯瞰で写されている（写真20）。更に当グスクの石積み遺構が写されているものが２葉あり（写真21、22）、現在は殆ど残存していない高摩文仁グスクの遺構が良好に残存していたことを窺える貴重な写真資料であると言える（註４）。

今帰仁グスクは大隅の石積みや平郎門などが写った５葉で、特定できるグスクの中で最も少ない枚数となっている。撮影当時はすでに城壁の修復がある程度、完了していることから（註５）、現在見られる状況とあまり大差は無い。

中城グスクについては残存状況の良好な一の郭、二の郭、三の郭、井戸郭の石積みや裏門の姿が写さ

写真17　高摩文仁グスクの展望台

写真18　高摩文仁グスク全景

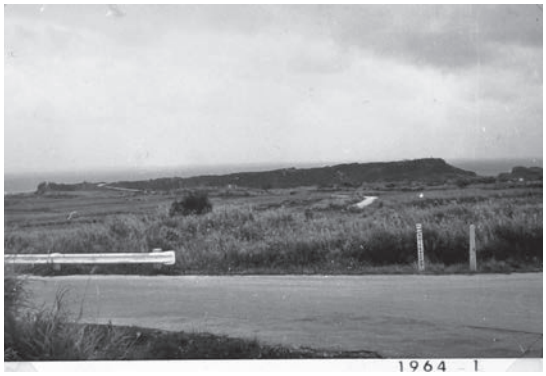

写真19　高摩文仁グスクの丘陵全景

写真20　高摩文仁グスクから摩文仁集落を遠望

（本ページの画像は全て兵庫県立歴史博物館所蔵）

れており、これらも今帰仁グスク同様に城壁の修復が完了していることから（註６）、現在見られる状況とあまり大差は無い。

３．場所が未特定の写真資料

場所が特定できるグスクとは対照的に、その特定が困難な場所を写した写真資料も多く見られる。それらは主に遠景を捉えた写真であり、なかでも移動車中の車窓から撮影されたものもみられる（写真23～26）。また、遠景を捉えた写真でも特徴的な建物や石積みといった遺構が写っていないために場所の特定が困難な写真資料（写真27、28）や拝所や屋敷の近影を写した画像においても、現在すでに失われている建造物や構造物であることから特定が叶わないものも見られる（写真29、30）。

このように撮影場所が特定できないものの、先に紹介したモノクロネガフィルムの前後からその場所を推定できる写真資料も少ないながらも存在している。

写真31は低丘陵の全景を捉えた写真資料であるが、周辺に電信柱と電線以外は人工物が写っていないことから、その場所の特定を困難にしている。２葉を切り張りして１葉に合わせて丘陵の全景としていることから、グスクの遠景を捉えたものであることは推測することができる。また、その内部に所在している拝所が写真30であるものと見ることができる。そして、モノクロネガフィルムで当該写真の前に泡瀬ビジュルの鳥居が写された写真資料（写真32）があり、その後には南城市玉城にある仲村渠桶川（写真33、34）や玉城グスク（写真35）が写された写真資料が見られる。沖縄市泡瀬から南城市玉城へ車両での移動をしたと仮定すると軍道13号線、現在の国道331号線を南下して、与那原から琉球政府道13号線、現在の県道77号線で南城市方面へ向かう経路が考えられる。更に琉球政府道48号線、現在の県道48号線に入り南城市玉城仲村渠へ向かうのが最短経路となる。

その経路途中にあるグスクとして南城市大里に所在する島添大里グスクや南城市玉城船越に所在する船越グスクがあり、その何れかの可能性が指摘できる。しかし、両グスクが立地する丘形とその周辺地形から写真資料にある低丘陵とは大きく異なってい

写真21　高摩文仁グスクの石積み①

写真22　高摩文仁グスクの石積み②

写真23　場所不明①

写真24　場所不明②

（本ページの画像は全て兵庫県立歴史博物館所蔵）

写真25　場所不明③

写真26　場所不明④

写真27　場所不明⑤

写真28　場所不明⑥

写真29　場所不明⑦

写真30　場所不明⑧

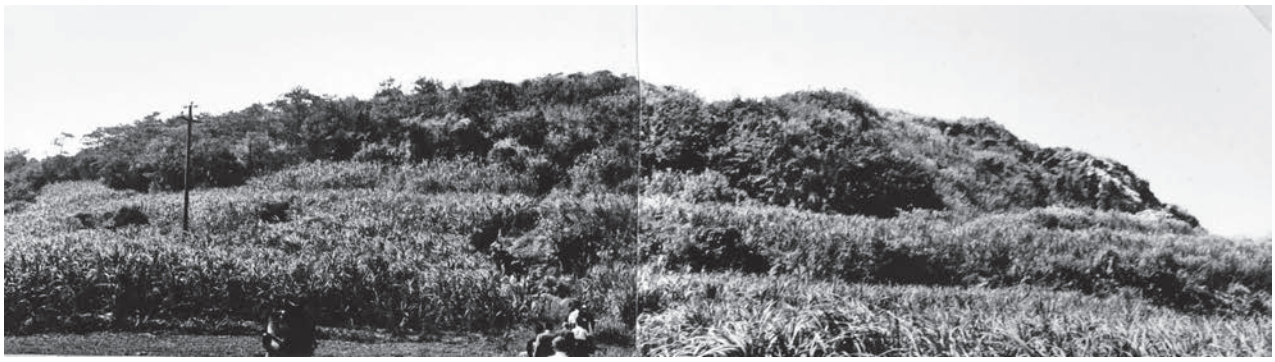

写真31　場所不明⑨

（本ページの画像は全て兵庫県立歴史博物館所蔵）

写真32　泡瀬ビジュルの鳥居

写真33　仲村渠桶川①

写真34　仲村渠桶川②

写真35　玉城グスク内の天つぎあまつぎの御嶽

（本ページの画像は全て兵庫県立歴史博物館所蔵）

ることにより、候補から外れてくる。

他の経路としては那覇市奥武山から分岐する琉球政府道７号線、現在の県道７号線で糸満市米須方面まで南下する経路が考えられる。その途中に豊見城市保栄茂に所在する保栄茂グスクがある（註７）。保栄茂グスクが立地する丘形の姿は写真25にある低丘陵の丘形と近似している。また、当該グスクの南側には畑が広がる耕作地であることも写真25にある低丘陵の前面に広がる畑となっている耕作地とも近似している（写真36）。

以上のように丘形と周辺の地形の共通点が見られることから更なる検証は必要であるものの、写真25に見る低丘陵は保栄茂グスクの全景を捉えた写真資料である可能性を現時点では挙げておきたい

写真36　現在の保栄茂グスク全景

（註８）。

４．まとめ

兵庫県立歴史博物館が所蔵する鳥羽正雄コレクションについては城郭研究資料において極めて重要な情報が含まれていることは言を俟たないが、それは沖縄県内に所在する城郭を研究する上においても例外ではない。これまでに1969、70年に沖縄県内にて撮影されたと思われる当該コレクションの写真資料を概観してきたが、当時におけるグスクの現状を知る上で極めて貴重な情報が含まれていたことはすでに触れてきたとおりである。

だが一方で撮影された場所が特定できない写真資料が数多く見られることについても触れてきた。本稿を通して撮影場所の特定につながる有益な情報を得ることができれば幸いである。

また、撮影場所が特定されている写真資料についても三重グスクや高摩文仁グスクのように、現在は損壊、若しくは喪失してしまった遺構の実態が明らかになったように、今回取り上げきれなかった新たな知見が得られる可能性も十分にある。今後もこれら写真資料の新たな情報の収集に努めていく次第である。

紙数の都合で全ての写真資料を掲載できなかったことから不十分な内容になってしまったこと並びに鳥羽正雄がどのような視点でグスクを捉えていたのかについての考察にまで踏み込めなかった。これらも含めて今後、ご叱正を請うところである。しかし、それでも本稿を通して鳥羽正雄コレクションに見る写真資料の重要性を多くの方々に知っていただき、そして更なる当該資料の検証が進められていくことを筆者は期待して、本稿を締めたい。

【註釈】

（註１）戦前期におけるグスク研究の経緯については山本1999にまとめている。

（註２）モノクロプリントとモノクロネガフィルムの寄贈年が異なるのは、兵庫県立歴史博物館学芸員の竹内信氏のご教示によると鳥羽正雄コレクションが膨大な量に及ぶことから、段階的に寄贈の手続きを進めていったためであるとしている。

（註３）首里城跡から琉球大学が西原町字千原の千原キャンパスへ機能が移転したのは1982年以前であるが、ここでは1982年に行われた首里城復元期成会と沖縄県との懇親会にて、琉球大学側は当該年度に琉球大学所管の城跡内に設置されたプレハブとは撤去する旨、1983年度に第２工学部校舎を撤去する旨が挙げられている（首里城復元期成会1993）。

（註４）現在の高摩文仁グスクは平和創造の森公園の一角に位置付けられており、公園整備の影響により石積み遺構は根石が断片的に残存するのみで、遺構は地上からほぼ姿を消している（新城1982）。

（註５）1962 ～ 67年にかけて琉球政府文化財保護委員会により今帰仁グスクは城壁並びに正門の整備が行われている（沖縄県教育委員会2001）。

（註６）1961 ～ 1968年にかけて琉球政府文化財保護委員会により中城グスクは一の郭と二の郭の城壁が修復されている。（沖縄県教育委員会2001）

（註７）保栄茂グスクは三山時代の山南が根拠地とする南山グスクの出城の機能を担っていたと考えられており、山南王である汪応祖の三男である保栄茂按司が築いたとされている（新城1982）。また、過去には豊見城高等学校郷土史研究クラブによる発掘調査も実施されており、グスク土器や中国産陶磁器をはじめ、炭化米・麦が出土している。12世紀後半から15世紀中頃

の陶磁器が出土していることから当該遺跡の時期もこの時期に比定されている（豊見城村教育委員会1988）。

（註８）保栄茂グスク内には写真24に見るような建造物は現在見られない。そのため、後年に撤去された可能性、あるいは保栄茂グスクではなく全く別の場所に所在する拝所を撮影したものと思われる。

【主要参考文献】

鳥羽正雄1942「沖縄の城」『城郭と文化』大東出版社

中京大学学術研究会1974「鳥羽正雄先生略年譜と著作目録」『中京大学教養論叢』第15巻１号

鳥羽正雄1980「沖縄の城」『日本城郭史の再検討』日本城郭史研究叢書 名著出版

新城徳裕1982『沖縄の城跡』緑と生活社

上間清1985「沖縄における歴史的建造物の評価と人物」『第５回日本土木史研究発表会論文集』日本土木史研究会

豊見城村教育委員会 1988「豊見城村の遺跡」『豊見城村文化財調査報告書』第３集

首里城復元期成会1993『甦る首里城 歴史と復元』

山本正昭1999「戦前のグスク研究略史」『地域文化論叢』第２号 沖縄国際大学大学院地域文化研究科

沖縄県教育委員会2001『世界遺産：琉球王国のグスクと関連遺産群』

堀田浩之2004「鳥羽正雄と本邦築城史編纂事業について」『塵芥』第15号　兵庫県立歴史博物館

兵庫県立歴史博物館2024『開館40周年　兵庫・沖縄友愛提携50周年記念特別展　琉球王国と首里城』

謝辞

文末ではありますが、今回、本稿をまとめるにあたっては鳥羽正雄コレクションを所蔵している兵庫県立歴史博物館の竹内信氏をはじめとする同館学芸員の皆様から多大なご協力を賜ったことを感謝申し上げると共に、写真資料に見える場所についての同定にご協力賜りました以下の方々についてはご芳名をもって感謝の意を示します。

上里隆史、園原謙、上江洲安享、木村謙介、佐伯信之、島袋春美、田名真之、仲程勝哉、縄田雅重、仁王浩司、宮里信勇、盛本勲（敬称略）